



# 広報

京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻  
 京都大学医学部人間健康科学科



## 目次

○学科長メッセージ	学科長 足立 壯一… 2	検査技術科学コース	助教 谷一 靖江… 9
○退任のご挨拶		リハビリテーション科学コース	助教 伊藤 明良… 9
	京都大学名誉教授 細田 公則… 3	○平成 27 年度健康科学市民公開講座	……11
元看護科学コース	講師 滝澤 寛子… 4	○2015 年度オープンキャンパス	……12
元看護科学コース	助教 宮田 千春… 4	○人間健康科学系専攻から博士が 11 名誕生しました	…13
元検査技術科学コース	助教 山本 康子… 5	○人間健康科学系専攻・人間健康科学科	
元検査技術科学コース	助教 伊藤 洋志… 5	平成 28 年度入学試験結果及び	
元看護科学コース	助教 竹之内沙弥香… 6	平成 27 年度修了・卒業者数	……22
○新任等挨拶		○平成 27 年度卒業生の進路調査結果	……24
融合ユニット	教授 澤本 伸克… 7	○人事異動	……25
検査技術科学コース	准教授 笠井 宏委… 8	○日誌	……26
看護科学コース	助教 鳥井 美江… 8	○あとがき	……27

## 学科長メッセージ

足立 壯一

人間健康科学科では、日本と世界の医療の将来を担う意欲のある学部学生の入学を歓迎しており、そのような学生に合わせた教育を行っています。

人間健康科学科および、その大学院の人間健康科学系専攻では、京都大学医学部附属病院の高度先進医療を担い、看護師、保健師、助産師、臨床検査技師、理学療法士、作業療法士として、特に研究を推進し、指導的役割を果たす高度医療専門職としての研究と教育が推進されています。国立大学改革において、日本における京都大学の立ち位置を踏まえて、平成 25 年度に「世界トップレベルの先端医療技術の開発および臨床フィールドにおける実践の追及を通じ、世界レベルの研究を牽引する研究者の養成」のミッションが再定義されています。これは、専門職を含めた人間健康科学専攻において、世界のトップレベルの研究と、研究者の養成を目指すものです。

上記のミッションを達成するため、今年度の入試から大改革を行います。高度医療専門職や世界レベルの研究者の育成の素地を学部段階からつくり、大学院への進学率を向上させるため、平成 29 年度よりから学生定員を 100 名に変更し、現行の 4 専攻を「先端看護科学コース」、「総合医療科学コース」、「先端リハビリテーション科学コース」へ再編し、学部・大学院を通した一貫教育を実施します。改組後の入学定員 100 名のうち、一般入試による入学定員を 70 名とし、現行の専攻別入試を一括入試に変更することにより精鋭化します。各コースへの進路振分けは、2 回生後期に学生の自由選択とします。特色入試による入学定員は現行の 16 名から 30 名（看護 20 名、理学 5 名、作業 5 名）に増員し、明確な目的と熱意を持った学生の受入をより一層促進します。

社会はグローバルのレベルでも、また日本の国内でも急速に変化しており、高齢化社会を含めて、さまざまな問題が生じています。科学技術の進歩は急速でダイナミックであり、それらに合わせて医療は急速に変化しています。そのような社会と医療の変化に対応して、独創的な新規の医療の科学の分野を開拓する研究と、研究者の養成が必要です。京都大学においては、自由の学風を基本理念として、医学研究科、医学部附属病院を始めとして、多くの部局において世界をリードする独創的な研究が行われています。人間健康科学科では、専門職としての実践的立場や医学部附属病院との連携により、臨床的有用性の高い成果を目指して、学部としての人間健康科学科のみならず、大学院の人間健康科学系までを含めた教育と研究の指導を目指しており、人間健康科学科と人間健康科学系全体での融合を活かして、医学研究科や医学部附属病院を含めた京都大学の他部局との共同研究での最新の科学技術の進歩の活用することにより、高度医療専門職を含めた医療において、世界トップレベルの研究と、研究者の養成が期待されます。先端看護科学コースでは、**高度実践研究者養成プログラム**を開講し、**先端リハビリテーション科学コース**では、**先進・融合リハビリテーション科学講座**を新設します。大学院では、**修士・博士一貫教育**を行うとともに、**高度実践看護師、専門理学療法士、専門作業療法士**を取得し、平成 31 年度に京都大学医学部附属病院に竣工予定の **iPS 治験病棟**等で働く**高度医療専門職**を養成します。また、新たな研究領域として、先端看護科学コース、先端リハビリテーション科学コース、総合医療科学コースを融合する**ビッグデータ医科学領域**を設定します。ビッグデータ医科学は、ゲノム医療に基づく個別化医療と、そのために必要な新たな早期診断手法の研究開発を強力に加速するために必須の領域です。この領域の研究開発や人材育成の具体的な取組は、我が国ではこれまで皆無に等しく、米国に大きく遅れをとっています。人間健康科学科では、**バイオインフォマティクス・ビッグデータ科学・ゲノム医科学・医療情報学・医療統計学**に総合的に精通した指導者によって、体系化したカリキュラムが検討されています。本学科から輩出される人材が、医療ビッグデータ解析や臨床ゲノム解析に基づく医療や研究開発プロジェクト、人材育成プログラムで活躍し、我が国のみならず世界を牽引していくことが期待されます。

少子高齢化、グローバル化、医療の高度化を鑑み、京都大学人間健康は、高度医療専門職養成、新たな医療専門職育成、新たな研究シーズ発掘、世界レベルの研究者育成を志向した教育を学部から一貫して行います。



## 退任のご挨拶

京都大学名誉教授 細田 公則

平成 27 年 12 月 31 日人間健康科学系専攻長を退任し、平成 28 年 1 月 1 日より国立研究開発法人国立循環器病研究センターの生活習慣病部門 動脈硬化・糖尿病内科部長として着任し、2 月から動脈硬化・糖尿病内科、高血圧・腎臓科、予防健診部から成る生活習慣病部門の部門長が空席になったので、併任しています。専攻長の任期の 3 月までの京都大学での勤務を希望しましたが、国立循環器病研究センターへ 1 月から異動する必要が生じ、12 月末で退任となり、教員、職員、また、旧執行部と新執行部の先生方には大変世話になりました。

平成 20 年 7 月に京都大学大学院医学研究科内分泌代謝内科学講師から人間健康科学系専攻看護科学コース臨床看護学講座生活習慣病看護学分野教授に着任し、以来、7 年半、人間健康科学系の教員、職員、学生、院生の皆様には大変御世話になりました。着任後は、笹田昌孝専攻長、坪山直生専攻長の時代には、教職員の皆様には、看護科学を中心に高度専門職養成と人間健康科学の研究と教育について、新参の私に大変懇切に教えて頂き、また、個々の学生、院生に対する教育や、人事や組織の運営においては、どうあるべきかを、多くの先生方から学ばせて頂き、感謝の念に堪えません。更に、椎名専攻長の時代、そして、私が専攻長を勤めている時期には、執行部の先生方、人間健康科学系全体の先生方に、組織改革という極めて難しい状況で、皆様に助けて頂きました。この時は、京都大学本部、医学研究科執行部、医学研究科事務、附属病院執行部や各科、附属病院事務などを含めて、大変御世話になりました。

国に財政状況の変化に伴い、教育、研究、医療の状況が変化し、かつ、世界のグローバル化の中で、国立の法人においては、新たな改革を行って、生き残って行く必要が生じています。国立大学改革の一環として京都大学でも組織改革が行われ、人間健康科学の組織改革も、その中で生じています。京都大学人間健康科学の組織改革が世界における医療における教育、研究を先取りしたものになり、京都大学人間健康科学が発展し、また、教職員の皆様がその中で活躍されることを祈念しています。

この組織改革の中で、医療、医学が高齢化社会、世界のグローバル化の中で、今後どう変化するのか、どのように先取りすれば良いのか、どのような貢献が可能なのかについて、皆様に非常に良く教えて頂きました。私としては、教えて頂いた事、経験させて頂いた事に感謝し、今後、微力ながら、社会への貢献に努めたいと存じます。

他研究科を含めて京都大学、医学研究科、医学部附属病院は日本の大学、医学部、病院の中で最も優れたものの一つであり、また、世界の大学と比較しても、かなり高いレベルにあり、多くの分野で、かなり優秀な人材が居られます。人間健康科学系がその地の利、人の利を生かして、京都大学、医学研究科、医学部附属病院と連携し、発展される事を祈念しています。

私が異動した国立研究開発法人国立循環器病研究センターでも、国立の法人として、大学と同様な状況が生じており、更に専門医制度の変化の影響などもあり、財務と組織の改革を行いながら、生き残って行く必要性が生じています。国立循環器病研究センターは循環器系を中心にした組織であり、私はその中で、生活習慣病の分野の発展を担当しています。医師達はほぼ同じ階の中にオフィスを持っており、診療科の間の壁はかなり低く、かつ、診療と研究で各科の間で連携する事が求められています。このような環境を生かして診療、研究を行い、京都大学の人間健康科学系の先生方とも、今後、連携させて頂き、皆様の発展に貢献出来れば大変幸いです。

kiminorihosoda@ncvc.go.jp

国立研究開発法人 国立循環器病研究センター  
生活習慣病部門長 動脈硬化・糖尿病内科 部長  
京都大学名誉教授

〒 565-8565 大阪府吹田市藤白台 5 丁目 7 番 1 号  
代表電話：06-6833-5012

## 退任のご挨拶

元看護科学コース 講師 滝澤 寛子

平成 28 年 3 月末日をもちまして京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻を退職いたしましたので、ご挨拶申し上げます。

私が京都大学に着任いたしましたのは平成 23 年 8 月で、翌年の平成 24 年度入学生から保健師選択課程が始まりました。当初は、(通称?!)「旧カリ」「新カリ」「新新カリ」の 3 つのカリキュラムが進行し、入学年度によって異なる履修要件に注意しながら、幾度となく成績表をめくって単位の修得状況を確認したことが、今では懐かしい思い出となっております。そして、在職中、保健師選択課程の教育に携わらせていただきましたこと、京都大学の学生さんだからこそできる教育をさせていただきましたことが、私にとって一番の宝物でございます。地域看護学講座の桂先生、大倉先生、そして先に退職された志澤先生と、保健師選択課程の学生さんたちに、どのように成長してもらいたいか、そのためにどのような関わりをしていくかについて議論し合い、講義・演習・実習の展開において新たな試みをさせていただきました。知識・技術のみならず、そのコアとなる態度・価値観にも焦点をあてた教育プログラムの考案や、具体的教育方法としての反転授業の取り入れなどなど、これらの取り組みを実現することができたのも、すべて、講座の先生方をはじめ、看護科学コース・人間健康科学系専攻の先生方、そして学生さんのお蔭だと心より感謝しております。

そして、人間健康科学科の事務室の皆様にも多大なサポートをちょうだいしました(今現在も、ちょうだいしております!!)。私の困った顔をキャッチしてお声かけをはじめ、のちに反転授業の教材として活用させていただくことになった「保健指導の悪い例」の面接場面の撮影にもご協力をいただきました。本当にありがとうございました。

4 月からは、京都学園大学健康医療学部で勤務しております。今までと異なる文化の営みに、時に戸惑いながら、新たな役割を遂行すべく努力しております。これからも京都大学での学びを糧に、引き続き精進してまいりたいと思っておりますので、ご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、人間健康科学系専攻のますますの発展と、皆さまのご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

## 退任のご挨拶

元看護科学コース 助教 宮田 千春

平成 28 年 3 月末日をもって京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻助教を退職いたしましたので紙面をお借りしてご挨拶申し上げます。

平成 26 年に京都大学医学研究科人間健康科学系専攻で博士課程を修了後、同専攻の地域看護学講座在宅看護学分野の助教に就任し、学生として 3 年、教員として 2 年と 5 年間「京都大学」に所属させて頂きました。助教としての在職は 2 年と大変短い期間でしたが訪問看護、介護施設看護、認知症高齢者看護などの教育に携わることができました。

学生の施設実習では、高齢者を地域で支えるという強い熱意を有した多くの看護職、介護職の方々との出会いがあり、在宅看護に求められているケアの在り方や課題、今後の方向性などを議論させて頂きました。この交流では、現場の貴重なご意見を頂くことができたとともに多くのことを学ばせて頂き大変感謝しております。在宅看護は、看護教育においてはまだ歴史も浅く、在宅看護に携わる看護職数も就業している看護職数全体の約 2% であり、超高齢化社会を迎える日本において、未だ充足されているとは言い難い状況です。在宅看護のケア提供の場である介護施設、訪問看護では医療施設の医療モデルとは異なる生活モデルに焦点を当て、看護・介護両面からのアプローチによりケアが提供されており、この生活モデルに焦点を当てたケアを、いかにすれば学生に伝えることができるか日々模索していたことが思いだされます。

また、研究者としては学部、大学院生の研究指導に携わり、老年看護、多職種連携・チーム医療の在り方をともに考え、多くの課題を抽出できたと感じております。また、本来の自分の研究分野である看護管理に関しては、実習施

設における施設看護の現状から介護保健施設で提供されるケアの質の向上のために、介護保健施設の看護管理者に期待される役割や看護職に必要とされる能力について研究を進めることができました。

平成 28 年 4 月より、九州大学大学院医学研究院保健学部門看護学専攻で勤務しております。出身地である九州において、看護師育成に携わることができる喜びを日々感じるとともに、新たな先生方との出会いや異なる教育システムに刺激を受けております。着任して早 2 か月が経過いたしました。現在はまだ日々の講義や学生指導に忙殺されておりますが、今後は「京都大学」で培ってきた臨床・研究・教育の経験をもとに、微力ながら保健学部門の発展に貢献していきたいと考えております。

最後になりましたが、ご指導くださいました在宅看護学分野の木下彩栄教授をはじめ、看護科学コースの先生方、人間健康科学系専攻の先生方および職員の方々に心より感謝申し上げますとともに、皆様の益々のご活躍とご発展を祈念申し上げます。今後ともご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



## 退職のご挨拶

元検査技術科学コース 助教 山本 康子

平成 28 年 3 月末日をもちまして京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻助教を退職致しました。京都大学には平成 18 年 4 月に赴任し 10 年間を過ごさせて頂きました。在職中には、優秀な学生さんからは多くの刺激を受け、また先生方から色々な事をご指導頂きながら教育・研究が行えたことは大変貴重な経験となりました。10 年の間に数多くの貴重な出会いがあり、ご縁を頂いた先生方と研究をご一緒させて頂けた事はとても楽しい時間でした。また学科を超えた先生方とも交流させて頂けた事も思い出深い事の 1 つです。

4 月より藤田保健衛生大学に赴任しております。京都大学で培った多くの経験を活かし、今後も教員として、また研究者として成長して参りたいと思っております。

最後になりましたが、長きに渡りご指導くださいました検査技術科学コースの先生方、人間健康科学系専攻の先生方および職員の方々に心より感謝申し上げますとともに、皆様の益々のご発展を祈念申し上げます。今後ともご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



## 退任のご挨拶

元検査技術科学コース 助教 伊藤 洋志

平成 28 年 3 月 31 日をもちまして、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻を退任いたしました。平成 15 年 4 月に前身の京都大学医療技術短期大学部（京大医短）衛生技術学科の助手に着任し、以来、医学部保健学科を経て医学研究科人間健康科学系専攻へと発展を遂げる 13 年間に多くの方々のご指導のもと過ごさせていただきました。誌上をお借りして御礼を申し上げます。

私は、母校でもある京大医短を卒業して臨床検査技師の免許を取得後、東京医科歯科大学大学院博士前期課程修了を経て神戸大学病院検査部に入職しました。臨床現場で求められる検査のあり方や技師の果たすべき役割についての視点を持つ貴重な経験でしたが、一方で新しい優れた検査診断薬や検査機器等について、ユーザー側の観点から若干

の貢献はできるものの、開発そのものに貢献できる機会や自身の力量にも限界があることも感じました。そのような時、研究活動を通じて臨床検査に貢献すべく、前述のとおり大学教員へ転職の機会をいただいた次第です。大学院生時代は、エリスロポエチン受容体からの細胞内情報伝達機構という基礎寄りの研究を行って参りましたが、京都大学では笹田昌孝教授（当時）のご指導により、好中球を主とした生体防御機構に関する研究に従事いたしました。感染症や炎症性疾患の病態解明や治療応用に繋がる点に魅力を感じ、現在まで継続しております。研究者としてなかなか立ちできない日々でしたが、笹田教授、その後を引き継いでいただきました足立壯一教授、および多くの先生方による粘り強いご指導とご支援により、ようやく博士号取得とともに助教の職を卒業することになりました。改めまして深く御礼申し上げます。

4月1日より、長浜バイオ大学バイオサイエンス学部准教授として着任いたしました。新設の臨床検査学プログラム担当として立ち上げ業務に奔走しておりますが、京都大学での多様な教育・業務経験がことごとく生かされていることを実感する毎日です。初心を忘れず、教育研究活動を通じて臨床検査に貢献していく所存です。今後ともご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、検査技術科学専攻・コースの在学生・卒業生のみなさまへ。多様な進路や可能性を前にするも、確固たるモデルケースを見い出せずに思い悩むこともあるかと思えます。ぜひ、「自分の後に道は出来る」の精神で、自分のやってみたい仕事や方法に取り組んで欲しいと思えます。検査技術科学を修めた者の専門性とは、高度な解析技術を臨床材料や生体に適応することができ、医学・医療の知識に基づいて有用な情報を得て、それを活用できるところにあると思えます。このような資質は、病院検査部門はもとより、様々な分野で生かされることは間違いありません。折しも人間健康科学科は、関係他部局と密に連携した斬新な教育研究組織の再構築に向かって歩み始めました。高度医療専門職やそれを背景とした優れた研究者を養成する、他大学に類をみない孤高の組織としてさらに発展していくことを期待いたします。

## 退職のご挨拶

元看護科学コース 助教 竹之内 沙弥香

梅雨入りも間近となり、通勤途中で咲く紫陽花が爽やかに感じられる季節となりました。大学院生時代を過ごしました懐かしい医学部キャンパスで、新たな一步を踏み出して早くも2ヶ月が経過いたしました。平成28年3月末で退職させて頂きましたが、在職中5年10ヶ月の間、皆様にはあたたかいご支援とご指導を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。

人間健康科学系専攻では、多くを学ばせて頂き、充実した日々を過ごさせて頂きました。その中でも特に印象深いのは、看護実習指導と、先生方から直にご指導を得られる機会でした。

看護学部生が何週間もの間、終日附属病院にておいて看護を体験し学ぶ看護学実習においては、個々の学生さんと密接に関り指導にあたらせて頂く中で、日々のタスクについての議論はもとより、患者さんの傍に居ることの意味、個々の死生観、他人をアドボケートすること等、看護にまつわる幅広いトピックスについても熱く議論を交わしました。看護の楽しさや素晴らしさを実感し成長してゆく学生さんを支援する機会を頂きましたことは、私の喜びでした。

しかし一方で、患者さんとうまくコミュニケーションを図ることのできない学生さんや、大きな課題を前に足がすくんでしまう学生さんとは、共に悩み苦しみ活路が見出せない時もありました。そのような折、いつも寛容かつ柔軟に応じて下さり、適切な学生指導ができるように後押しをして下さいました看護の先生方からのご指導は、何にも代え難いものでした。また、教育・研究・社会貢献の各場面で、卓越した専門性を携えて多くの看護師のロールモデルとして活躍されている先生方の素晴らしいご活動に携わらせて頂く機会をたくさん頂きました。これらから得られました体験や学びは、私の貴重な財産です。

今後は、人間健康科学系専攻で頂きました経験や皆様との出会いを糧として大切にしながら、現職でもより一層精進いたします。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願いいたします。

最後に、このような貴重な経験を下さり、そしていつもあたたかくご支援、ご指導くださいました任和子先生、田

村恵子先生、天谷真奈美先生、澤本伸克先生、西山知佳先生、小西奈美先生、佐藤隆平先生はじめ、看護科学コースの先生方、人間健康科学系専攻の先生方、職員の皆様、そして実習等でお世話になりました、附属病院看護部の皆様に心より御礼を申し上げますとともに、皆様のご健康と今後ますますのご発展をお祈り申し上げます。



## 新任のご挨拶

近未来型人間健康科学 融合ユニット 教授 澤本 伸克

平成 27 年 6 月 1 日付けで医学研究科・人間健康科学系専攻・近未来型人間健康科学融合ユニット・近未来システム・技術創造部門に着任させていただきましたので、謹んでご挨拶申し上げます。

本ユニットは、平成 21 年 4 月人間健康科学系専攻の博士課程設置に伴って新設されました。これまで荒井秀典先生がご担当でしたが、国立長寿医療研究センターへご栄転されるのに伴い、その後任を拝命いたしました。本ユニットのミッションは、「異分野融合や産学連携によって、社会ニーズ、医療ニーズ、患者ニーズに応じた新しい医療システムの構築に関わる人材を育成すること」であり、附属病院の多くの先生方と共同で行わせていただく臨床研究を通して、その役割を果たして参りたいと考えております。

私事ですが、自己紹介をさせていただきます。平成 6 年に本学神経内科(木村淳教授)に入局させていただきました。人間の心の働きを生み出す脳の構造と機能、そしてその異常である神経疾患の病態解明の研究に関わりたいと考え、平成 9 年に脳病態生理学講座(柴崎浩教授)の博士課程に加えていただきました。当時、ラット脳血流の酸素化の程度を非侵襲的に評価する fMRI が報告されて 6 年が経過し、ヒト脳の非侵襲的機能評価法が続々と発表されていました。大学院では、パーキンソン病の認知機能障害、特に実行機能障害の病態解明に取り組みました。そして、行動学的な解析によって運動障害とは独立した存在であること、非侵襲的な脳血流解析によって運動障害と同様に基底核障害に関わることを報告いたしました。卒業後は、ヒト脳内のドパミン神経伝達を非侵襲的に評価する方法を確立していた英国ロンドン大学インペリアルカレッジ(David J Brooks 教授)に留学する機会をいただき、認知機能におけるドパミン神経伝達の役割の解明に取り組みました。平成 15 年からは脳機能総合研究センター(福山秀直教授)、臨床神経学(高橋良輔教授)に加えていただき、脳各領域の機能分担を解明するこれまでの研究から、脳領域間のネットワークから創発する機能と病態を解明する研究へと展開しております。

重要な職務となる教育につきましても、高次脳機能とその障害機構の解明の重要性、深遠さ、そして研究の魅力を、優秀な京大の学生と共有したいと考えております。また、私自身が大学院時代に直接ご指導いただきました本田学先生(現国立精神・神経医療研究センター部長)から、研究成果を専門家でない一般の人にわかる言葉で語ることを、その意義を普遍化して概念を引き出すことを繰り返す求められました。若い世代の研究者に、自らの研究成果を一般の言葉で語り、その意義を普遍化することの重要性を伝えて参りたいと考えております。

「寄せ集めた全体が部分の和より大きくなるのは、部分の組み合わせが単なる加法ではなく、乗除法あるいは論理積の形成といった性格をもつからである。合体の瞬間に閃きが走る、とも言えようか<sup>1</sup>。」1861 年に Broca 野が提唱されて脳の機能局在についての知見が蓄積されてきましたが、領域間のネットワークを介した繋がりによって、個々の領域が生かされ、個が元来もつ以上の機能を発揮する可能性が示唆されております。例えば、パーキンソン病患者に対する胎児細胞移植では、移植片のドパミン産生量は術後 6 ヶ月に既にプラトーに達しますが、ネットワークへの統合が進むことで、臨床症候がその後も 1 年以上に渡って徐々に改善していくことが指摘されています。今後は、優秀な人間健康科学専攻の学生と新たなネットワークを形成し、脳機能とその障害機構の解明の重要性、深遠さ、そして研究の魅力を共有して、微力ではございますが教育・研究に尽力して参る所存でございます。今後とも、何卒ご指導、ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

1. グレゴリー・ペイトソン / 佐藤良明訳 (1982) 「精神と自然」思索社

## 就任のご挨拶

検査技術科学コース 准教授 笠井 宏委

2016年4月1日付で、京都大学医学研究科人間健康科学系検査技術科学コース医療検査展開学講座に准教授として着任しました笠井宏委と申します。本紙をお借りして、皆様にご挨拶申し上げます。

私は、1998年に東京医科歯科大学医学系研究科機能検査学専攻を修了後、東京医科歯科大学医学部附属病院で1人目の臨床研究コーディネーターとして勤めたのですが、ここでは業務自体を構築することになりました。2006年に国立がん研究センター中央病院に移ってからは、スタディマネジメントという新たな役割の位置づけを行うことを経験して参りました。

2011年5月からは、京都大学医学部附属病院臨床研究総合センター（現）において、医師主導治験のスタディマネジャーを務めてまいりました。難治性食道癌を対象とした、医薬品と医療機器の併用治療に関する薬事承認の取得と保険適用のために尽力いたしました。今では、従来治療法がなかった患者さんに対する有効で安全な治療法として活用されています。臨床応用を目指した一連の臨床開発プロセスのなかで、スタディマネジメントの重要性を示すことが出来たことから、2015年12月には同センター内にスタディマネジメント室が設置されるに至り、現在は、ここで人材の育成と確保を目指しています。

昨今、医療技術は難易度がますます高くなり多様化するとともに、研究の信頼性をいかに確保するかという点も重要になっています。このため、臨床研究環境はこの数十年で大きく変化し、臨床研究を担うスタッフには、より専門的な知識だけでなく、研究プロジェクトを推進するスキルも求められております。このような背景のなか、これからのアカデミア研究を活性化し、よりよい医療技術の臨床応用を加速化するためにも臨床研究・臨床開発に必要な人材の育成は急務であると考えております。今後は、こちらで人材の育成プログラムの構築と、それを実走することによる人材の教育に努めていきたいと存じます。

今後とも、ご指導ご鞭撻を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

## 着任のご挨拶

看護科学コース 助教 鳥井 美江

この度、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻在宅医療看護学講座助教に着任しました鳥井美江と申します。本誌をお借りして着任のご挨拶をさせていただきます。

私は、三重大学医学部看護学科在学中の卒業研究において、褥瘡をはじめとした炎症反応に興味を持ったことから大学卒業後、同大学大学院医学研究科に進学しました。修士課程・博士課程の6年間は免疫学を専攻し、生体防御医学講座の栗林景容教授と加藤琢磨先生、溝口明教授（神経再生医学・細胞情報学講座）、珠玖洋教授（遺伝子・免疫治療学講座）のご指導の下、気道炎症モデルと炎症性大腸発がんモデルを用いて抗酸化因子チオレドキシニンにおける炎症抑制作用機序について研究してきました。学位取得後は、京都大学医学部附属病院免疫膠原病内科の看護師として膠原病や糖尿病の患者さんのケアに携わる一方で、三重大学大学院医学研究科のリサーチアソシエイトとして研究を継続しておりました。

2013年9月に京都大学健康長寿社会の総合医療開発ユニットの特定助教としてリーディングプログラムに携わらせていただくことになってからは、荒井秀典先生（現 国立長寿医療研究センター副病院長）のご指導のもと医学・工学・薬学部の大学院生を対象に看護や福祉分野の教育を担当させていただきました。リーディングプログラムに携わらせていただく中で、老年医学・老年看護分野に興味を持ち、京都大学医学部附属病院リウマチセンターとの共同



研究で関節リウマチ患者さんを対象にサルコペニア、フレイル、カヘキシアの研究をさせていただくようになりました。サルコペニア、フレイル、カヘキシアは近年老年医学分野で注目されており、関節リウマチ患者さんの調査を通して患者さんの苦しみや触れ、目の前で起っている現象だけでなく、その現象の予防や緩和の為に何が必要か、どのような介入ができるかということを考えるようになりました。この研究はまだ始まったばかりですが、疼痛や変形を伴いながら、十数枚ものアンケートや測定など、研究にご協力いただいた患者さんに還元できるように今後も励んでまいりたいと思います。

学生教育では、在宅看護学や地域看護学実習などを担当させていただくことになりましたが、実習指導の経験が浅く、周囲の先生方にサポートしていただいております。私自身が今まで以上に知識や見解を深め、追求して行くと同時に学生を持つ視点を尊重し、学生のもっている『ひきだし』を増やしていく事ができる関わりを目指したいと考えております

教育者としても研究者としてもまだまだ未熟ではございますが、精一杯努力いたしますので今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



## 着任のご挨拶

検査技術科学コース 助教 谷一 靖江

平成28年4月1日付で、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻の助教に着任しました谷一靖江と申します。本誌をお借りして、皆様にご挨拶申し上げます。

私は、大阪大学医学部保健学科検査技術科学専攻を卒業後、同大学院医学系研究科保健学専攻の博士前期課程、博士後期課程を修了しました。博士後期課程修了後、京都大学ウイルス研究所 生体防御研究分野で助教として勤務し、サイトカインによるリンパ球の分化と活性化を中心とする免疫学の研究を行って参りました。長年、京都大学内で勤務していたとはいえ、異動後は研究所とは全く違う環境に慣れないことも多い中、教育活動では周囲の皆様を支えていただき、研究活動の面においても多大なご配慮をいただいておりますこと、大変感謝しております。

研究者になろうなど大学入学時には微塵も思っていなかった私が、学部4年生時の卒業研究で初めて研究というものに触れ、面白いからもう少し頑張ってみようという勢いだけで、今日までアカデミックでの活動を続けてこられたのは、様々な人との出会いがあり、言葉に支えられてきた結果だと思っております。今後は、学部や大学院の学生にそれを還元できる人材となれるよう、非力ではありますが、努力して参りたいと思っております。また、教育活動や研究活動にも尽力していく所存です。今後とも、ご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



## 就任のご挨拶

リハビリテーション科学コース 助教 伊藤 明良

平成28年4月1日付で、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻理学療法学講座運動機能解析学分野の助教に着任いたしましたので、皆様にご挨拶申し上げます。

私は平成15年に国立療養所東名古屋病院附属リハビリテーション学院（現国立病院機構東名古屋病院附属リハビ

リテーション学院)を卒業後、名古屋市内の病院にて5年間理学療法士として臨床経験を積みました。その後、大学にてさらに学びたいという思いから、平成20年に京都大学医学部人間健康科学科へと3年次編入学いたしました。実はこの3年次編入学という制度で入学した学生は私以降誰もいないようで、とても希少な経歴となっていますが、この学部生時代に受講した一般教養科目は、当時理学療法しか知らなかった私にとって非常に面白く、高校を卒業したばかりの若者の中に紛れて、一人目を輝かせながら理学部などの先生方とディスカッションしたことを思い出します。思い返してみますと、この経験が研究に対する私の視野を広げてくれたのだと思います。このような経験を活かして、これから学生の教育に尽力していきたいと考えております。

大学院では運動機能解析学分野の黒木裕土教授のご指導のもとで研究を行ってまいりました。主に変形性関節症治療のための基礎的な研究として、関節軟骨に対する物理刺激の影響を解析してきました。博士号取得後は、幸いにも日本学術振興会特別研究員PDに採用され、医学研究科整形外科の松田秀一教授の教えをいただき、再生医療におけるリハビリテーション(Regenerative Rehabilitation)についての研究および活動を開始いたしました。この分野は国際的にみてもまだ萌芽的段階ではありますが、米国ではこの5-10年の間に急速な発展を見せるだろうと目されています。当研究グループは当該分野を進展させるための世界で唯一の組織であるRegenerative Rehabilitation Consortium Leadership Councilのメンバーに加盟し、国際コンソーシアムの一員として活動を開始しました。特別研究員としての仕事は助教就任に伴い1年で終了してしまいましたが、京都大学に再生医療リハビリテーション分野の国際的拠点を形成し、世界のリーダーとしての役割を担う一助となるべく活動を続けていく所存であります。

最後になりましたが、今後も研究・教育に尽力していきたいと考えております。皆様のご指導ご鞭撻を何卒宜しくお願い申し上げます。

## 平成 27 年度健康科学市民公開講座

平成 27 年度学術委員長 十一 元三

平成 27 年 11 月 21 日（土）に「発達症（発達障害）とこれからの社会・医療」をテーマに第 28 回健康科学市民公開講座を開催致しました。平成 27 年度は発達症のなかでもとりわけ社会的注目度の高い「自閉スペクトラム症」に焦点を当て、平成 26 年度に当専攻に設置された発達障害支援医学講座（寄附講座）の紹介と活動報告に加え、自閉スペクトラム症の支援の第一線で活躍しておられる専門家を交えて今後の社会・医療の在り方を探ろうという内容の企画を致しました。

定員を上回る 230 名余りの方々から事前申込を頂き、当日もほぼ満席となる 199 名のご来場がありました。専攻長（細田公則教授、当時）の開会挨拶では、自閉スペクトラム症という問題が医療にとどまらず、いかに万人に関わる身近なテーマであるかが述べられました。続いて、発達障害支援医学講座の運営委員長（筆者）より同講座の概要について、自閉スペクトラム症の研究、専門人材の育成、社会啓発・貢献の 3 つの柱を趣旨とするという説明を行いました。

講座の第一部は、発達障害支援医学講座の教官による講演からなり、佐藤弥准特定教授による「臨床脳科学と発達症」、魚野翔太特定助教による「対人認知の心理学と発達症」の 2 演題のお話がありました。この 2 講演から、自閉スペクトラム症の脳基盤および認知処理のメカニズムの解明が進んでいる状況がうかがわれました。

第二部のシンポジウムでは、発達障害支援医学講座の特定助教で児童精神科医の義村さや香先生の座長のもと、発達症をめぐる社会・医療の現状について、異なる領域の専門家にお集まり頂いて議論を交わしました。シンポジストとして、京都府発達障害者支援センター（センター長）の竹村忠憲氏、滋賀県心の教育センター（チーフカウンセラー）の生天目聖子氏、当専攻の加藤寿宏准教授（作業療法士、発達領域）および山田純栄講師（作業療法士、精神科領域）の 4 名にご登壇頂き、義村さや香先生による総論説明に続いて、幼児から成人にわたる支援の現状と問題点を論じて頂きました。そこから、現在の社会における自閉スペクトラム症への支援ニーズは、あらゆるライフステージと生活領域に及んでいることが明確にうかがわれました。シンポジウム後半では、会場からの質疑やコメントも合わせた総合討議が行われましたが、非常に活発な意見交換のうちに瞬く間に時間が過ぎ、予定より 30 分ほど延長して閉会に至りました。

アンケートでは、回答が得られた 118 名のうち、「大変良かった」が 65、「良かった」が 45 という良好な結果でした。また、個別のコメントからも“もっと時間を十分とってほしい”など本テーマへの要望が強いことが窺われました。以上のように、第 28 回健康科学市民公開講座は当学科に相応しいテーマのもと盛会のうちに実施できましたことをご報告いたします。



## 2015 年度オープンキャンパス

2015 年度オープンキャンパスは 2015 年 8 月 8 日（金）に前年度と同様、A 時間帯、B 時間帯の 2 回にわたって行われました（表 1）。全体説明会では、足立学科長の挨拶のあと、各専攻（看護、検査、理学、作業）の紹介が各コース担当教員からされました。その後、各専攻に分かれて、実習等の体験、研究室との施設見学、学生個別相談が行われ、アンケート調査からも、いずれも好評でした。参加者は表 2 に示しますが、A 時間帯は女子 161 名、男子 36 名の計 197 名、B 時間帯は女子 154 名、男子 36 名の計 190 名が参加しました。専攻別では看護 119 名、検査 115 名、理学 67 名、作業 14 名でした。また、都道府県別では京都 57 名、大阪 53 名を始めとして東北や九州からも参加者がありました。2016 年度は 8 月 9 日（火）に行われる予定で、今後の京都大学医学部人間健康科学科に多くのやる気のある学生のリクルートのために、重要なイベントであると思われます。

表 1 オープンキャンパス 2015 スケジュール

A 時間帯 (10:00 ~ 12:00)		B 時間帯 (12:30 ~ 14:30)	
w9:30	全体説明会受付開始 ※全体説明会会場：第 9 講義室	12:00	全体説明会受付開始 ※全体説明会会場：第 9 講義室
10:00	開会 学科長あいさつ	12:30	開会 学科長あいさつ
10:05	各専攻の紹介 (看護・検査・理学・作業)	12:35	各専攻の紹介 (看護・検査・理学・作業)
10:30	各専攻説明会、体験ブース ○看護学専攻（実習室、演習室など） ○検査技術科学専攻（共通機器室など） ○理学療法学専攻（運動機能研究室など） ○作業療法学専攻（生理機能解析研究室など） ★相談コーナー 各専門職、一般・特色入試、 学生生活相談など	13:00	各専攻説明会、体験ブース ○看護学専攻（実習室、演習室など） ○検査技術科学専攻（共通機器室など） ○理学療法学専攻（運動機能研究室など） ○作業療法学専攻（生理機能解析研究室など） ★相談コーナー 各専門職、一般・特色入試、 学生生活相談など
12:00	終了	14:30	終了

表 2 オープンキャンパス 2015 参加者状況

●参加者数

	参加者数		高 1		高 2		高 3		既卒・その他	
	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子
A 時間帯	161	36	61	18	58	9	34	4	8	5
B 時間帯	154	36	61	20	68	9	19	3	6	4
計	315	72	122	38	126	18	53	7	14	9
	387		160		144		60		23	

※既卒・その他（A 時間帯）＝既卒女子 7・男子 3、その他女子 1、その他男子 2

※既卒・その他（B 時間帯）＝既卒女子 2・男子 3、その他女子 4、その他男子 1

●専攻別

	看護		検査		理学		作業		未定	
	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子
A 時間帯	62	3	44	13	25	14	8	0	22	6
計	65		57		39		8		28	
	看護		検査		理学		作業		未定	
	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子
B 時間帯	51	3	48	10	14	14	6	0	35	9
計	54		58		28		6		44	

●参加者の都道府県別人数【※A・B時間帯合わせた人数】

北海道	5	青森	1	秋田	0	岩手	0	宮城	0	山形	0
福島	1	茨城	0	千葉	3	栃木	2	群馬	0	埼玉	3
東京	8	神奈川	2	山梨	1	新潟	2	長野	3	静岡	14
愛知	17	岐阜	8	三重	38	富山	1	石川	3	福井	2
滋賀	17	京都	57	大阪	53	兵庫	37	奈良	9	和歌山	12
徳島	12	香川	12	愛媛	20	高知	3	岡山	10	広島	17
鳥取	0	島根	1	山口	3	福岡	1	大分	1	佐賀	
長崎	2	熊本	4	宮崎	1	鹿児島	1	沖縄	0		

## 人間健康科学系専攻から博士が 11 名誕生しました

### 博士授与者と論文題目

長 井 桃 子

論文題目：Alteration of cartilage-surface collagen fibers differs locally after immobilization of knee joints in rats  
(ラット膝関節不動後の軟骨表面のコラーゲン線維変化は領域により異なる)

阿比留 睦 美

論文題目：The effect of the challenging two handed rhythm tapping task to DLPFC activation  
(DLPFC を賦活させる難易度の高い両手によるリズムタッピング課題の効果について)

丛 冰

論文題目：Study on High-Speed Sensing and High-Quality Image Reconstruction for Photoacoustic Biomedical Visualization Technology  
(光超音波を用いた医用生体可視化技術における高速センシングと高画質化に関する研究)

太治野 純 一

論文題目：Intermittent application of hypergravity by centrifugation attenuates disruption of rat gait induced by 2 weeks of simulated microgravity  
(微小重力環境によって惹起されたラットの歩行動作変化は遠心重力による間欠的高重力刺激によって抑制され得る)

張 項 凱

論文題目：Regional Comparisons of Porcine Menisci  
(豚半月板の部位別比較)

西 口 周

論文題目：A 12-week physical and cognitive exercise program can improve cognitive function and neural efficiency in community-dwelling older adults: a randomized controlled trial  
(12 週間の身体・認知面の複合運動プログラムにより、地域在住高齢者の認知機能と脳活動効率が改善する - 無作為化比較対照試験による検討 -)

藪 野 景 子

論文題目：A sulfated glycosaminoglycan linkage region is a novel type of Human Natural Killer-1 (HNK-1) epitope expressed on aggrecan in perineuronal nets  
(ペリニューロナルネットを構成するアグリカン上には新規 HNK-1 糖鎖が存在する)

北 谷 亮 輔

論文題目：Descending neural drives to ankle muscles during gait and their relationships with clinical functions in patients after stroke  
(脳卒中後片麻痺患者における歩行時の足関節周囲筋に対する下行性入力と臨床的機能指標との関連)

福 谷 直 人

論文題目：Association of Varus Thrust With Pain and Stiffness and Activities of Daily Living in Patients With Medial Knee Osteoarthritis  
(内側型変形性膝関節症患者における外側スラストと痛みとこわばり及び日常生活活動の関連性)

正 木 光 裕

論文題目：Studies on sagittal spinal alignment in middle-aged and elderly women and on strength training of lumbar back muscles  
(中高齢女性における立位姿勢アライメントと腰背部筋トレーニングに関する研究)

松島佳苗

論文題目：Unusual sensory features are related to resting-state cardiac vagus nerve activity in autism spectrum disorder

(自閉症スペクトラム障害児の非定型的な感覚特性は安静時の迷走神経活動と関連する)



## 博士課程を終えて

長井 桃子

この度、本専攻のリハビリテーション科学コースの博士後期課程を修了し、博士号を取得しました長井桃子と申します。私は少し変わった経歴を持っており、学部・修士課程・博士課程とそれぞれ異なる大学で学位を取得しています。修士課程修了ののちは、京都市内の病院にて理学療法士として数年間の臨床を経験しましたが、再度研究を行いたいとの気持ちが沸き立ち本学の博士課程に進学しました。

わたくしの研究は基礎研究と呼ばれる、ラットなどの動物を用いてヒトの病態を再現し、実験台で解析を行うような研究になります。もともと修士課程も基礎研究ではありましたが、臨床の間のブランクは大きく、感覚を取り戻すのに時間を要しました。しかし、2年目以降は徐々に環境や実験手技にも慣れ、学位取得につながる、臨床で見られる疾患の病態理解に寄与する研究報告を出すことができました。また、在学中も、以前勤務していた病院の非常勤理学療法士として勤務しておりました。基礎研究は実験による拘束時間が長いいため人との会話がなくなり、どうしても内に入りやすい側面があります。その中で忙しいながらも継続していた臨床の場合は、臨床の感覚や視点を維持するだけでなく患者さんと話すことで、私にとってとても有意義な息抜き場となっていました。

所属研究室は、ある程度学年が進むと博士課程のメンバーが主体となり、学会発表準備や英論文のたたき台、研究の組み立てから方針の軌道修正を行う環境でした。そのため、自分自身の研究内容だけでなく、ほかのメンバーの研究内容についても共に考え作り上げていくことで、これらのスキルが鍛えられたと感じています。その他にも、研究の展開方法や着目する視点が修士課程や学部の研究室とは異なり、総じてとても刺激的かつ充実した3年間でした。博士課程を修了したいま、忙しいながらも臨床を続けてきたことや、苦しいながらも様々なスキルを鍛えられたこの期間は、自身の大きな糧になっていると強く感じています。

博士課程修了後は、博士課程の研究テーマを継続しながら、大学院の進学を志すきっかけにもなった解剖学をさらに学ぶべく、医学研究科内の別の研究室にてポスドク研究員として勤務しています。今後は、より医学に貢献できるような研究を行っていきたいと考えています。最後に、博士課程の修了に際し、黒木先生はじめ研究のサポートをいただいた先生方、一緒に切磋琢磨した研究室のメンバー、ならびに心の支えとなってくれた家族に、この場を借りて深く感謝申し上げます。

## 博士課程での日々を振り返って

阿比留 睦美

私は 2009 年からリハビリテーション科学コース脳機能リハビリテーション学分野の山根研究室にて学び、2015 年 5 月に博士（人間健康科学）の学位を取得いたしました。在学中は、リハビリテーションにどのように音楽が活用されているかについての研究に音楽療法士の立場で取り組みました。リズム課題と歌唱課題を組み合わせた二重課題は健常者の前頭葉にどのように影響するかに関して近赤外分光法（NIRS）を用いて検討した研究成果は、主論文『The effect of the challenging two handed rhythm tapping task to DLPFC activation』としてまとめました。リズム・タッピングという扱いやすい課題を個々の能力に合わせて難易度調整することで、DLPFC（前頭前野背外側領域）を賦活させ得ることがわかり、将来、様々なセラピストや個々の人が認知リハビリテーションや頭の体操実施時に、一つの楽しみながらできる選択肢として音楽を活用するきっかけとなることを願っております。また、高次脳機能障害のための NPO 法人「つくしの会・京都」での音楽療法を 2009 年より継続し、2010 年度日本音楽療法学会プロジェクト研究費を得たことは現在の活動につながっています。



これまで私は、山根寛先生のリハビリテーションの信念「病と共に暮らす」に大きく影響を受けました。園芸療法士・作業療法士と連携し地域のコミュニティづくりを学ぶ機会をたくさん頂き、2015 年には左京区の「大学と地域の相互支援促進事業」の助成金を得て、町家「人と生活研究所 音楽と植物と・・・」を開設いたしました。懐かしく寛げる町家の環境の中で、同じ世代の方々とのお互いを通して改めて自分の存在を確かめて頂こうと、60 歳以上の方を対象としたプログラム「吉田ミュージックカフェ」や、パーキンソン病の方々が楽しみながらリハビリテーションを行い、病と上手に付き合っていくきっかけおよび互いに集い語り合う場の提供を目指したプログラム「カラコロクラブ」、そして誰もが参加できる夜のリラクゼーションプログラム「音楽とフェルデンクライスの夜」を現在も継続しています。

最後に、山根寛先生をはじめ NIRS を活用した研究では酒井浩先生、澤田泰洋先生、主論文では三谷章先生、村井俊哉先生、精山明敏先生、山田純栄先生に大変根気よくご教授頂き心より感謝いたします。京都大学での貴重な学びの体験を大切に、これからも音楽を楽しみ、かつ医学の知識とリハビリテーションの視点より客観的に捉えながら、心身の健康増進・世代間交流の場、そしてお互いの抱える問題を少しでも解決できるような場を地域に提供できるよう頑張ってまいります。今後ともご指導・ご鞭撻のほど何卒よろしく願いいたします。

町家「人と生活研究所 音楽と植物と・・・」

〒 606-8317 京都市左京区吉田本町 12 番地

<http://www.ongakutosyokubutsuto.com/>

音楽とリハビリテーション研究会

<http://www.geocities.jp/ongakutosyokubutsuto/210otorihahome.html>



## 私の博士号取得物語

氷 从

私は平成 15 年 4 月に初めて日本にきました。中国で希望の大学に入れず、親戚に日本留学を薦められました。最初の 2 年間は東京にあるフジ国際語学院で日本語を学びました。クラスの担任だった当時 67 歳の神野先生はとてもエネルギーの溢れる、博学でお話が大好きな方でした。授業はいつもおもしろいですがつつい雑談になってしまう傾向があります。それにもかかわらず、クラスの成績はいつも学校のトップでした。おかげさまで、私も日本留学試験でいい成績を取ることができ、学習奨励費つきで筑波大学情報学類に進学しました。

筑波大学では、工学と情報学の基礎について学びました。3 回生のとき、サンリオ辻信太郎社長が理事長を務める辻アジア奨学財団の奨学生に選ばれました。2 年間毎月奨学金を理事長から手渡しで受け取り、食事をしながら財団関係者の日本の方々とアジア諸国の奨学生のみなさんとコミュニケーションをし、交流と理解を深めました。「みんなで仲良く、みんなで助け合う」という辻理事長の理念を引き継いで、世界とくにアジアのみなさんと友好親善をしていきたいと思います。また 4 回生のとき、NHK スペシャル番組「激流中国 病人大行列 ～13 億人の医療～」を観て、中国の少子高齢化と医療難問題に感銘を受け、医用生体工学分野へ進むことを決意しました。卒業研究では、超音波装置を用いて大動脈瘤の進行度の定量化について検討しました。さらに、工学と医学両方の視点を備え、工学的アプローチだけではなく実際臨床的研究もすることで人の健康に貢献したいと考え、京都大学人間健康科学系専攻に進学しました。

修士・博士課程では従来の超音波ではなく、最近 20 年盛んに研究されてきた光と超音波を融合した新しい診断モダリティ光超音波について研究してきました。具体的には、従来の感度と帯域がトレードオフな関係となるターゲットスキャンを必要とする超音波トランスデューサの代わりに、ファブリ・ペローセンサという高感度、広帯域のセンサを用いて、スキャンすることなく光超音波計測が出来る手法の高速化について検討しました。本計測法では、計測した信号をターゲットの光吸収量として画像化する際、違う組織の音速の差や音波の減衰、反射、屈折などの影響により、位置ずれやボケなどのアーチファクトをもたらします。そこで、私は最適な音速または音速分布補正をすることで、光超音波再構成画像の高画質化についても検討しました。こうして 12 年間かけ、やっと平成 27 年 7 月に博士号を取得することができました。

10 月からは本学 COI プロジェクトの研究者として、スマート超音波システムの研究開発に従事しています。光超音波の研究に加え、従来の超音波の小型化、社会実装にも参加し、多くの研究者や会社と共同研究して、幅広く先端医療・高度医療に携わるチャンスに恵まれました。将来巣立ちの時が来ても、いままで研究室で学んだことを糧に、これからは独立した研究者として頑張れる気がしています。最後になりますが、新米の大学生から現在の博士研究員まで 8 年間、私を育ててくださった椎名教授をはじめとする先生方、外国人の私に親切に接し、多大な援助をくださった関係者の皆様、数々の試練を、ともに乗り越え戦ってきた仲間達、ずっと支えてくれた両親に、この場を借りて深く感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。



## 博士号取得に思うこと

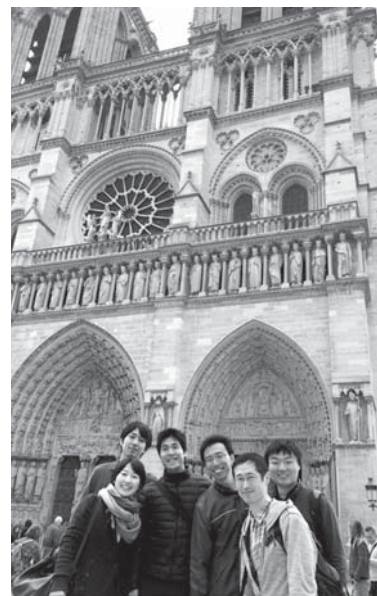
太治野純一

平成 27 年度に人間健康科学博士号を取得しました、太治野純一と申します。私は微小重力環境がラットの歩行動作に及ぼす影響とその予防策としての遠心重力について研究を進め、学位取得に至りました。

私は一般企業等から専門学校を経て理学療法士となり、療養型の病院で 7 年間勤務しました。その過程で、リハビリテーションや理学療法の学術体系をその外側から俯瞰したいと考えるようになりました。しかし当時は大学院の存在すら知らず、途方に暮れたものです。その後リハビリテーション科学の修士号をカナダで取得しましたが、このように理学療法士としても、また院生としても外来種である私を京都大学が受け入れて下さったのは、その自由闊達な風土ゆえだと考えています。

博士課程は可能性と限界のせめぎ合いの中で常に緊張を強いられる毎日でしたが、周囲の助けを得て重力生理学の分野に微力ながら貢献することができました。振り返ってみれば、企業時代から病院・院生時代と段階を経るにつれて、自身の見識が広がったと感じています。私自身の人生もまだ続きますが、これからは今まで受けた恩を少しずつ還元していけるよう日々の課題に取り組んで行こうと考えています。

最後になりましたが、黒木先生をはじめ教員の皆様方ならびに研究室の皆様に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます、学位取得の報告とさせていただきます。



## 大学院の 5 年間を振り返って

西口 周

平成 28 年 3 月に博士号を取得しました西口周と申します。この度は、本紙面をお借り致しましてご挨拶申し上げます。

私は平成 23 年 3 月に神戸大学医学部保健学科を卒業し、翌 4 月に本学大学院修士課程に入学しました。青山朋樹先生の大学院生 1 期生として山田実先生(現:筑波大学准教授)らと共に、研究室という枠組みに囚われず机上から一歩も二歩も外に飛び出し、「一般の人々にこそ面白いと感じてもらえる、メッセージ性のある研究」を実践してきました。具体的には、高齢者の介護予防(転倒予防・認知症予防)に関する研究と、企業や他大学工学部との共同研究で新しいリハビリテーションツールの開発をテーマに多くの研究

に携わりました。そして幸いにも、修士課程の間に国際誌への論文採択や国際学会発表、学会賞受賞といった多くの貴重な経験から、研究を 2 年で終わらせるのは勿体無いという単純な理由で博士課程への進学を決めました。

博士課程進学後には、その単純な進学理由の甘さからか将来へのビジョンがブレることが多々あり、先輩や親友に泣きつくこともありました。しかし、研究者としての悩みは研究で解決するしかない、と覚悟を決め、目標としていた高齢者の認知機能向上のための運動介入研究を完結させることができました。多くの先生方や後輩の協力があり、



何よりも参加高齢者のご好意があってこそ成り立った研究であり、研究を完結させる達成感と同時に難しさを実感した5年間でありました。研究者の見習いとしての大学院生生活において、たくさんの仲間と共にこのような感覚を多く体感できたことが、一番の財産だと感じています。これから同じ道に進まれる皆さんも、たくさんの人と感情を分かち合い、人間らしさを忘れずに過ごしてもらいたいと思います。

4月からは東京工科大学医療保健学部理学療法学科の助教として研究・教育活動に従事しています。つい先日まで大学院生として研究に専念してきた身ですが、学生にとってはすでに一教員であり、今までにない責任感を感じる毎日です。まだ大学院も設置されていない歴史の浅い学科ですが、ただ国家試験に合格し理学療法士として歩むためだけの教育ではなく、在学中に「研究って面白い」と思ってもらい、数年後に共に研究ができる研究仲間を作るという視点で「研究の教育者」を実践したいと考えています。私自身が京都大学で実体験として学んだように。

最後になりましたが、研究者としてのスタートラインに立てるまでに指導して下さい、たくさんの成長の機会を与えて下さりました、坪山教授、青山准教授をはじめとする先生方、研究室の仲間、研究室外の先輩・同期・後輩の皆様は厚く感謝致します。

## 博士号を取得して

藪野 景子

私は大学4回生で研究室に配属され、以来糖鎖研究の奥深さに惹かれて大学院修士課程・博士後期課程へと進学しました。大学院では外界からの刺激によって脳の機能や構造が変化する「神経可塑性」とその制御に関わる「糖鎖」について研究を行いました。

在学中は研究者としての基礎を学ぶだけでなく、解析の難しい糖鎖研究独特のアプローチ法にも触れ、充実した日々を過ごしました。ただ同時に一筋縄ではいかない研究の難しさを知り、博士後期課程へ進むかどうか非常に悩みました。しかし、「向いているか向いていないかは周りが決めることだから、自分がやりたいのであれば挑戦してみるべきだ」という後押しもあって、最終的には進学することに決めました。

実力不足を痛感しながらも日夜研鑽を積み、研究成果を論文にまとめて博士号を取得出来たことは、私にとって大きな自信に繋がりました。卒業後は縁あって海外の研究室で働かせて頂けることとなり、今夏からは新天地で研究者としての一步を踏み出す予定です。

最後になりましたが、ご指導賜りました岡昌吾教授、竹松弘准教授、ならびにいつも支えてくれた研究室の皆様はこの場を借りて深く御礼申し上げます。



最後になりましたが、ご指導賜りました岡昌吾教授、竹松弘准教授、ならびにいつも支えてくれた研究室の皆様はこの場を借りて深く御礼申し上げます。

## 博士号を取得して

北谷 亮輔

私は京都大学医学部保健学科卒業後、そのまま京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻の修士課程に進学し、修士課程・博士後期課程の5年間の大学院生活を送りました。学部時代の臨床実習中に、尊敬出来る先生方が勉学に励んでおられる姿を拝見し、自信を持って理学療法を行うためには自己研鑽を続ける必要があると思ったことが大学院進学を決意した経緯となりました。

修士課程・博士後期課程の5年間は主に脳卒中患者を対象に歩行・姿勢制御場面の下肢筋活動の解析を行い、脳卒

中患者の歩行・姿勢制御のより効率的な改善を目的とする運動療法の開発に寄与するために姿勢制御戦略の解明を行いました。特に博士後期課程の3年間は日本学術振興会特別研究員DC1として、研究活動に専念できる環境であったことは大変貴重な経験となりました。英語論文の検索から研究計画を立て、研究データの測定・解析、学会発表や英語論文の執筆など、どれも大変労力を伴いましたが、5年間大変苦労したからこそ人間健康科学の博士号を取得できたと思います。

4月からは脳卒中患者が多く入院している回復期リハビリテーション病院にて5年間で得た知識・経験を活かす形で臨床業務を中心に従事させて頂いております。まだまだ日本の理学療法分野では臨床と研究が切り離されていることに関し、研究的視点、および知見があるからこそ臨床もより効果的な選択が行えると思ひ、臨床も研究も積極的に行える理学療法士になるべく邁進する日々を送っています。

最後になりましたが、研究を指導して下さいました人間健康科学系専攻の恩師である先生方、医学研究科附属脳機能総合研究センターの先生方、いつも苦勞をともにし、支援してくれた研究室の仲間に厚く感謝いたします。



## 私にとっての博士号とは

福谷 直人

平成28年3月に博士号を取得させて頂きました福谷直人と申します。私は、愛知県の藤田保健衛生大学にて、理学療法士の国家資格を取得した後、同学大学院の修士課程に進学しながら、常勤で臨床を2年間経験しました。その後、本学の大学院の博士後期課程に入学させて頂きました。博士後期課程在学中は、週に4日程度、臨床業務を行いながら、研究活動を実施しておりました。本学の環境に慣れるまでにやや時間はかかりましたが、研究室のメンバーや指導教員の先生方にご支援をいただきながら、手探り状態で研究活動を進めていきました。周囲の皆様の多大なご支援のおかげで、国際誌でのアクセプトや博士号を取得することができました。

私は、研究活動の一方で、博士課程の研究シーズをもとに、事業化することを目指していた点が、他の博士号取得者とは異なるかと思ひます。事業化を目指した理由の一つに、研究成果を社会に発信することで“誰を幸せにすることができるのか？”という問いの答えを自分で見出したいという気持ちがありました。博士後期課程2年次より、ビジネスコンテストに出場し、ビジネスの根本を学ぶことができました。事業化を意識しだした半年後には、ビジネスモデルコンテストの日本大会で最優秀賞を受賞でき、日本代表として世界大会にも出場してきました。このような取り組みの中で学んだことは、研究もビジネスも、『誰を幸せにすることができるのか？』という意識を忘れてはいけないということです。私の博士後期課程での研究は、主に変形性膝関節症患者の膝関節痛に着目したものです。これは、臨床現場でもよく耳にする、『膝が痛いから、行きたいところも行けない。行く気にならない。』という悩みを持つ方々を幸せにするために取り組んでおりました。

現在は、株式会社バックテックを創立し事業を進めながら、同時に本学の研究員としても活動しております。私がこれまでの博士後期課程の経験を活かして、後輩の皆様にお伝えしたいことはひとつです。

『ぜひ、誰を幸せにする研究なのかを意識して研究し、その素晴らしい研究成果を社会に発信してください。』

最後にはなりますが、これまでの研究をご指導頂きました坪山教授、青山准教授をはじめとする先生方、いつも貴重なコメントを下さった研究室のメンバー、そして、研究の対象者や協力施設の皆様、そして家族に、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

## 博士号を取得して

正木 光裕

私は京都大学医療技術短期大学部を卒業した後、理学療法士として小児の施設、成人の病院に勤務しました。臨床で生じてきた疑問について研究で少しでも明らかにしたいと思い、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻の修士、博士課程に入学しました。

大学院では臨床を行う中で明らかにしたいと思っていた、身体の中でも体幹の機能について研究を進めていきました。研究の進め方が全く分からない中で先生方にご指導頂き、少しずつ前に進むことができました。修士課程では大学内で腰痛者の体幹の筋活動や動作、トレーニングについて検討していきました。この2年間は共に修士課程



に入学し切磋琢磨した研究室の同級生や先輩のおかげで研究を進めていくことができました。また、博士課程ではフィールドで高齢者の脊柱のアライメント、体幹筋の筋機能について検討していきました。この3年間は同じ研究室の後輩が自身の時間を割いて、測定を補助してくれたのおかげで研究を進めていくことができました。そして、フィールドで出会った高齢者の方々に研究を通じて関わる中で、日々心が励まされていたように思います。このように私が博士号を取得できたのは、リハビリテーション科学コース運動機能開発学分野の市橋教授をはじめとするご指導下さった先生方、様々な場面で支えてくれた研究室の仲間、研究を通じて出会うことができた方々のおかげです。この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

今振り返ると大学院での5年間はとても早かったように感じられますが、多くの研究に携わらせて頂いたことが、今後の私において大きな糧となっています。4月より京都を離れ、新潟にある新潟医療福祉大学で臨床、研究、教育に従事させて頂くこととなりました。新しい環境でのスタートになりますが、京都大学で学び経験させて頂いたことをいかして、脳性麻痺といった小児疾患の研究を行っていきたいと思っています。そして、これから京都大学大学院を入学、卒業される方々のご活躍を心よりお祈りいたします。

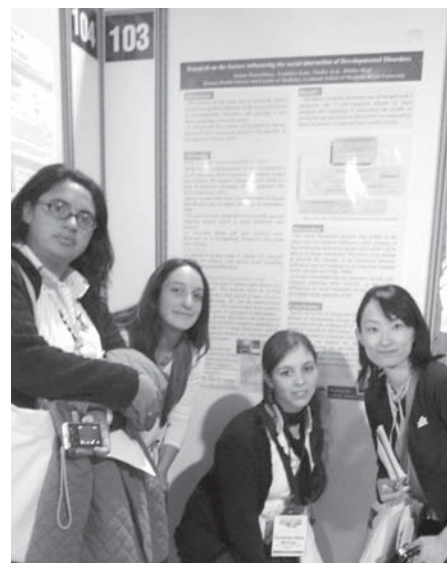
## 博士号を取得して―臨床に繋がる研究を目指した日々―

松島 佳苗

私が大学院への進学を志したきっかけは、青年海外協力隊への参加です。日本の真南に位置する赤道直下の小さな島国（パラオ共和国）で、たった一人の作業療法士でした。知識も技術も足りず、当時思い描いた理想の国際協力とは程遠いものでしたが、現地で沢山の素晴らしい出会いに恵まれました。その時の出会いと経験から、私は子ども達をもっと笑顔にできる作業療法士になりたいと思うようになりました。そして、大学院に行き、足りない知識・技術を学ぼう、臨床の疑問を自身で検証しようと決意し、平成 20 年に京都大学大学院医学研究科 人間健康科学系専攻修士課程に入学しました。

博士の学位取得までの道のりは長く、恩師の加藤寿宏先生をはじめお世話になった先生方には大変ご心配とご迷惑をおかけしました。しかし、私自身にとっては多くのことを学ぶことが出来たかけがえのない時間であり、この京都大学で学べたことを心から誇りに思っています。博士論文の研究では、自閉症スペクトラム障害児の感覚の問題に着目し、自律神経活動を計測・解析することに取り組みました。2年間で 100 名近くのデータを収集し、本当に苦しかった時もありましたが、共同研究者の先生方に支えて頂き、なんとか論文にまとめることができました。また、博士後期課程の在学期間には、World Federation of Occupational Therapists Congress 2010 (in Chile) をはじめとする複数の海外の学術学会で発表する機会にも恵まれ、国際的な視点から自身の研究と臨床を考える貴重な場を得ました。

研究も臨床も、一人の力で出来ることは限られています。同じ目的に向かって取り組める仲間、支えて下さる先生方、そして研究にご協力くださるお子さん、保護者の方一人ひとりへの感謝を胸に、発達期における作業療法の発展に貢献できるよう今後も日々努力していきたいと思えます。



**人間健康科学系専攻・人間健康科学科  
平成 28 年度入学試験結果 及び 平成 27 年度修了・卒業者数**

**平成 28 年度 医学部人間健康科学科入学試験結果**

専攻・日程		募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
看護学専攻	前期	69	137	73	69
検査技術科学専攻	前期	37	87	39	39
理学療法学専攻	前期	16	41	18	18
作業療法学専攻	前期	16	26	18	16
合 計		138	291	148	142

**平成 28 年度 医学研究科人間健康科学系専攻（修士課程）  
入学試験結果**

コース	募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
看護科学コース 【高度実践助産学系（内数）】	28 【10】	30[4] 【16[0]】	21[4] 【10[0]】	18[3] 【9[0]】
検査技術科学コース	13	34[1]	24[0]	22[0]
リハビリテーション科学コース （理学療法学講座）	4	19[2]	16[1]	16[1]
リハビリテーション科学コース （作業療法学講座）	4	7[2]	5[1]	5[1]
合 計	49	90[9]	66[6]	61[5]

[ ]の数は、社会人特別選抜（内数）

**平成 28 年度 医学研究科人間健康科学系専攻（博士後期課程）  
入学試験結果**

コース	募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
看護科学コース	15	15	9	9
検査技術科学コース		3	2	2
リハビリテーション科学コース （理学療法学講座）		6	6	6
リハビリテーション科学コース （作業療法学講座）		6	4	4
合 計	15	30	21	21

## 平成 27 年度 医学部人間健康科学科卒業生数

専攻	卒業生数
看護学専攻	76
検査技術科学専攻	36
理学療法学専攻	21
作業療法学専攻	18
合計	151

## 平成 27 年度 医学研究科人間健康科学系専攻（修士課程）修了者数

コース	修了者数
看護科学コース 【高度実践助産学系（内数）】	18 【7】
検査技術科学コース	21
リハビリテーション科学コース （理学療法学講座）	14
リハビリテーション科学コース （作業療法学講座）	5
合計	58

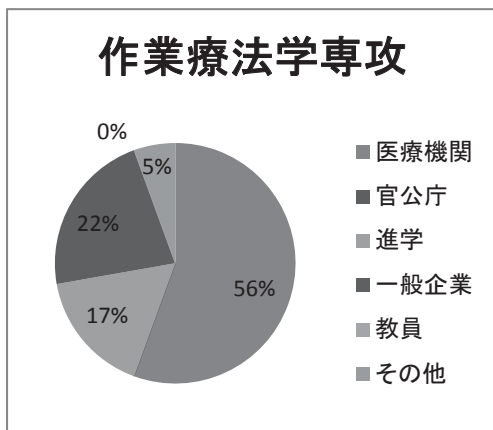
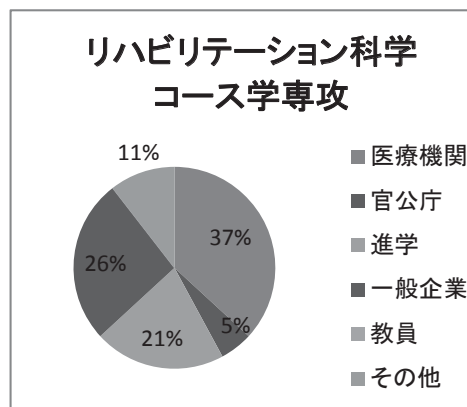
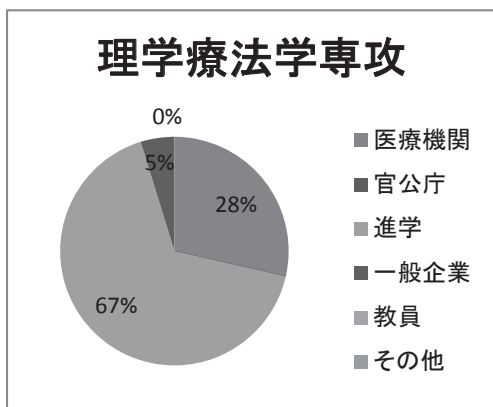
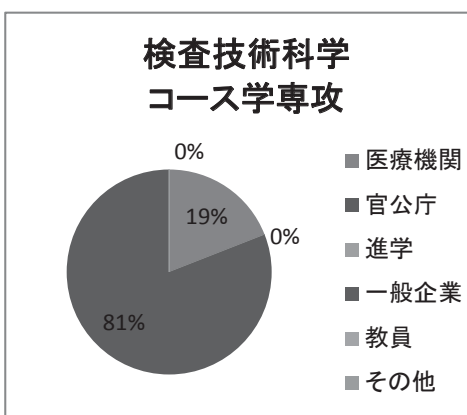
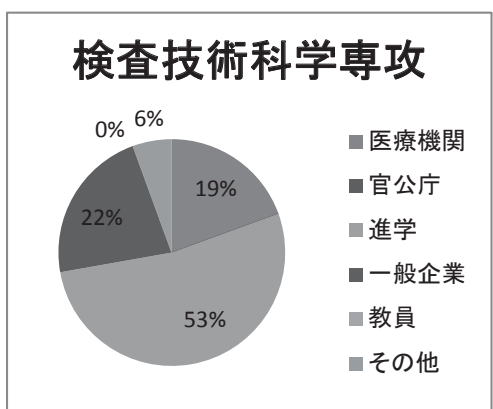
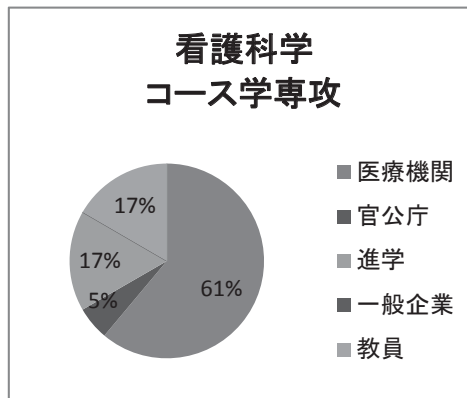
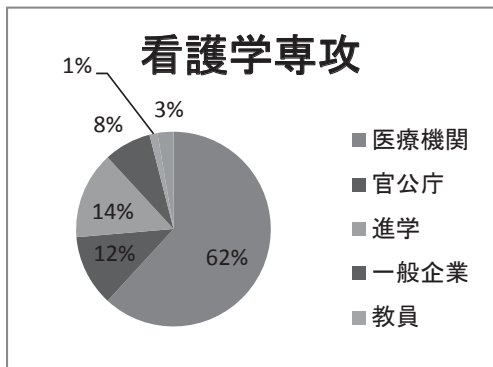
## 平成 27 年度 医学研究科人間健康科学系専攻（博士後期課程）修了者数

コース	修了者数
看護科学コース	6
検査技術科学コース	4
リハビリテーション科学コース （理学療法学講座）	8
リハビリテーション科学コース （作業療法学講座）	0
合計	18

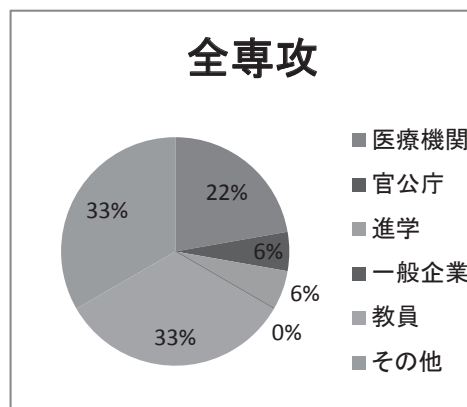
平成27年度(平成28年3月)卒業・修了生の進路調査結果

■学部

■大学院(修士)



■大学院(博士)





## 人 事 異 動

発令年月日	職 名	氏 名	所 属	異 動 事 由
平成				
27.6.1	教 授	澤本 伸克	近未来型人間健康科学 融合ユニット	昇任（医学研究科講師より）
27.12.31	教 授	細田 公則	看護科学コース	辞職
28.1.1	専攻長 (事務取扱)	足立 壯一	検査技術科学コース	専攻長 事務取扱 H28.1.1 - H28.1.15
28.1.16	専攻長	足立 壯一	検査技術科学コース	専攻長 H28.1.16 - H29.1.15
28.3.31	講 師	滝澤 寛子	看護科学コース	辞職
28.3.31	助 教	竹之内 沙弥香	看護科学コース	辞職
28.3.31	助 教	宮田 千春	看護科学コース	辞職
28.3.31	助 教	長谷川 聡	リハビリテーション科学コース	辞職
28.3.31	助 教	山本 康子	検査技術科学コース	辞職
28.3.31	講 師	古川 亮子	看護科学コース	辞職
28.3.31	助 教	伊藤 洋志	検査技術科学コース	辞職
28.3.31	主 事	東 敏樹	事務部	配置換（工学研究科教務課へ）
28.3.31	事務長補佐 (教務掛長)	松下 裕之	事務部	辞職
28.3.31	総務掛主任	天野 香奈子	事務部	配置換（医学部附属病院医療安全掛へ）
28.4.1	学系長	足立 壯一	検査技術科学コース	
28.4.1	准教授	笠井 宏委	検査技術科学コース	昇任（京都大学医学部附属病院臨床研究総合 センター開発企画部 助教（院内講師）より）
28.4.1	助 教	鳥井 美江	看護科学コース	採用（京都大学学際融合教育研究推進セン ター（LIMS）特定助教より）
28.4.1	助 教	谷一 靖江	検査技術科学コース	配置換（京都大学ウィルス研究所 助教より）
28.4.1	助 教	伊藤 明良	リハビリテーション科学コース	採用（日本学術振興会特別研究員（PD）より）
28.4.1	助 手	増田 さやか	看護科学コース	採用（京都光華女子大学より）
28.4.1	主 事	泉森 嘉宏	事務部	復帰（総合地球環境学研究所より）
28.4.1	教務掛長	中村 大輔	事務部	昇任（医学研究科人間健康科学系専攻教務掛主任より）
28.4.1	総務掛主任	和村 充二	事務部	配置換（医学部附属病院総合臨床教育・研修掛より）
28.4.1	教務掛員	宇都宮 智美	事務部	配置換（工学研究科教務掛より）

(H27.6.1 - H28.4.1)

## 日 誌 (H 27.4 ~ H 28.3)

27.4.2	病院協議会	9.3	病院協議会
4.3	修士課程 1 回生ガイダンス		教務・教育委員会
	博士後期課程 1 回生ガイダンス	9.10	執行部会議
4.7	学部入学式		臨時教授会
	学部新入生ガイダンス		医学研究科将来計画検討委員会
	大学院入学式		医学研究科会議
	人間・組織改革検討 WG		医学部教授会
4.9	執行部会議	9.11	大学院修士課程入学試験合格発表
	医学部・医学研究科将来計画検討委員会		3 年次編入学試験合格発表
4.13	医学研究科会議・医学教授会	9.14	拡大執行部会議
4.17	拡大執行部会議	9.17	リーディング大学院教授会
	リーディング大学院教授会		教員会議
	教員会議・教授会		教授会
4.23	医系懇談会	9.18	医学部遺骨返還式
	医学研究科専攻長会議	9.24	執行部会議
4.30	執行部会議		医学研究科専攻長会議
5.7	病院協議会	10.1	臨時執行部会議
5.14	執行部会議	10.8	病院協議会
	医学研究科将来計画検討委員会		教務・教育委員会
	医学研究科会議・医学教授会		執行部会議
5.18	拡大執行部会議		医学研究科将来計画検討委員会
	第 52 回国立大学臨床検査技師教育協議会		医学研究科会議・医学教授会
5.21	教員会議	10.13	拡大執行部会議
	教授会	10.15	リーディング大学院教授会
5.23	大学院説明会[リハビリテーション科学コース(作業)]		教員会議
5.28	執行部会議		教授会
	医学研究科専攻長会議	10.19	医系懇談会
5.30	大学院説明会 [検査技術科学コース]	10.20	解剖体祭
	大学院説明会 [看護科学コース]	10.22	執行部会議
6.1	第 10 回国立大学保健医療学系代表者協議会		医学研究科専攻長会議
6.4	病院協議会		臨時教授会
6.5	医学研究科・改組カリキュラム WG	10.30	京大関係病院長協議会定例総会
6.11	執行部会議	11.4	大学院博士後期課程入学試験
	医学研究科将来計画検討委員会	11.5	病院協議会
	医学研究科会議・医学教授会		教務・教育委員会
	教務・教育委員会	11.7	京都大学ホームカミングデー
6.13	大学院説明会[リハビリテーション科学コース(理学)]	11.12	執行部会議
6.15	拡大執行部会議		医学研究科将来計画検討委員会
6.17	教員会議		医学研究科会議・医学教授会
	教授会	11.14-15	特色入試第 2 次選考
6.18	創立記念日	11.16	拡大執行部会議
6.25	執行部会議	11.19	入試委員会
	医学研究科専攻長会議		特色入試委員会
7.2	病院協議会		LIMS 教授会
	教務・教育委員会		教員会議
7.3	第 61 回全国国立大学法人助産師教育専任教員会議		教授会
7.8	五〇会 (臨時親睦会)	11.20	11 月祭 (~ 23 日)
7.9	医学研究科将来計画検討委員会	11.21	第 28 回健康科学市民講座
	医学研究科会議・医学教授会	11.24	五〇会 (秋の会)
	執行部会議	11.26	執行部会議
7.15	拡大執行部会議		医学研究科専攻長会議
7.16	リーディング大学院教授会		医学研究科会議
	教員会議		臨時医学部教授会
	教授会	11.24	博士後期課程入試合格発表
7.23	医系懇談会	12.3	臨床実習指導者会議[リハビリテーション科学コース(理学)]
	医学研究科専攻長会議		病院協議会
	医学教授会		臨時教授会
7.30	執行部会議	12.10	将来計画検討委員会
8.3	病院協議会		医学研究科会議・医学教授会
8.6	オープンキャンパス		教務・教育委員会
8.21	3 年次編入学試験	12.11	執行部会議
8.25	大学院修士課程入学試験		総合医療科学 WG
9.2	全学教育シンポジウム	12.14	拡大執行部会議

## 日 誌

12.15	特色入試第2次選考合格発表	3.17	LIMS 教授会
12.17	LIMS 教授会 教員会議 教授会		教員会議 教授会
12.24	執行部会議 医学研究科専攻長会議	3.23	修士・博士学位授与式 修了を祝う会
12.28	臨時医学部教授会 KUROME	3.24	執行部会議 学部卒業式 卒業を祝う会 医学研究科専攻長会議 医学教授会
28.1.4	新年挨拶会		
1.7	教務・教育委員会 病院協議会		
1.12	執行部会議		
1.14	将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学教授会		
1.16	大学入試センター試験（～17）		
1.18	拡大執行部会議 医系懇談会		
1.21	LIMS 教授会 教員会議 教授会		
1.22	新春教授懇談会		
1.25	医学研究科専攻長会議 医学研究科会議・医学教授会 医学教授会		
1.28	執行部会議		
2.4	病院協議会		
2.8	臨時教授会		
2.9	五〇会総会		
2.10	特色入試最終合格発表		
2.12	執行部会議 将来計画検討委員会 医学研究科会議 医学教授会		
2.15	拡大執行部会議		
2.18	教務・教育委員会 LIMS 教授会 教員会議 教授会		
2.22	医学研究科専攻長会議 医学研究科会議・教授会		
2.25	執行部会議 学部入試（～26日）		
3.3	病院協議会 教務・教育委員会		
3.8	入試委員会 教授会 医学部教授会		
3.9	学部入試合格発表		
3.10	執行部会議 医学研究科専攻長会議 将来計画検討委員会 医学研究科会議 医学教授会		
3.14	拡大執行部会議		

## あ と が き

本年も無事に広報をお届けすることができました。人事異動や学位取得者を知って頂くのも大事ですが、本学科を取り巻く組織改革、特色入試など、環境が大きく変わるようなことがらについても皆様に確実に伝えたいと思います。今後もお力添えを頂けると幸いです。

(山田重人)

〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町53 <http://www.med.kyoto-u.ac.jp/>

